

孟軻の性善、荀子の性惡を非として、莊周を孔子に次ぐ第一人者とみる。また宋の趙巨胤・趙匡義を篡賊となし、元朝につかえた學者、許衡・吳澄や、趙孟頫を、忠の蝨、孝の螟と論斷する。

ところで彼の佛教への論は、全集にも散見するが、とくに興味深いものは、同じく罪知録の中にある論釋なる一章である。これは論釋とはいうが、實は佛教と儒教・道教が究極に於ては一致するという、いわゆる三教融合の立場を示したもので、そのなかばを宋代の儒學者張栻や、朱子らの佛教批判に對する反論についやし、いわば金の李屏山の鳴道集説などとよく似たものである。とくに朱子に對して、「我が佛法をもつて儒法用のとなし、功を己れに歸し、身を轉じて佛を排する」者となしまた儒家より佛教批判の焦點となつた寂滅ということについては、「人死して即ち滅し、また輪廻再生なしという理は、聖人の意にあらず」といい、「比丘が俗を出て煩惱を斷つことは、小乗の法であつて大乘ではさにあらず、佛教は國王より大臣長者居士に至るまで、すべて一切善法をとき、究竟は皆如來の地に至らしむるものであつて、ただ出家一門の至るものとなすにあらず、したがつて何ぞ儒者の譏を待たんや」という。

さらに彼の見解を検討すると、實は一つの據り所があることがわかる。すなわち同じ江蘇省の鎮江縣の沙門景隆が著した尙直編に負う所が甚だ大きいのである。尙直編とは一四四〇年、(正統五)、祝允明の生れる二十年前に書かれたものであり、祝允明は論釋の中で、尙直編の章句をかなり多く借つて來ているのである。そして彼の三教についての考え方は、同時代の學者

浙江餘姚の王陽明とも全く無關係とは言い得ないであろうし、さらに李卓吾や屠隆に祝允明の論釋が影響を及ぼしたということとは、當然考えられることである。ともかく祝允明がその時代の流れにあつて、大きな、役割を果していたことは否定できない。

ストア思想の特質

坂本 弘

ストア思想の特質を理解するためには、まずその成立の歴史的背景に目を向けることが必要である。當時のギリシアはアレクサンドロス遠征の後につづく變動の時代にあたり、測りがたい明日への危懼、運命への不安、が重苦しく垂れこめていた。他方、傳統的な世界觀も倫理的規範もすでにそのポリスの基礎を失い、民衆の精神的支柱としての實を有しなかつた。したがつて民衆は、このような不安と懷疑の中にあつてなお生き抜く支えとなるような時機相應の世界觀と實踐的規範とを模索しつつあつたのである。彼等の求めたのは、知を愛する心に呼びかける哲學であるよりは、生の支えとなり存在のよりどころとなる教えであつた。

ストア哲學の創始者ゼノン (キェプロスの Zenon 335-263 BC) がアテナイにおいて提唱したのは、まさしくそのような教えであつた。そしてその教えは本質において意志の教えであつたということができよう。このことは、ひとりゼノンのみならず、以後のストア思想の、全系列についていいうることであ

る。

眞の幸福、眞の生の意義は、欲望や官能の充足にあるのではなく獨立不可侵の意志の世界を確立するにある。ここにこそ眞の存在の充足がある。沈靜にして充實した眞の幸福がある。これが意志の教えの中核である。しかしその教えが眞に有意義であるためには、それは存在論的もしくは形而上學的な基礎をもたなければならぬ。でなければ、その努力はデスペラートな意志の力わざに終わるであろう。ことに長らく哲學的傳統に培われてきたギリシア的心性にとつてはこのような基礎づけは要であつた。

オーストリーの哲學者ゴンペルツ H. Gomperz は、ストア派の意志の教えを高く評價しながらも、それが多少とも杜撰な宇宙論と結びつけられていることを遺憾としている。しかし、この宇宙論は實は意志の教えの存在論的基礎づけを意味しているのである。彼等の説くところによれば、眞に在るものは、ピュシスのなもの、具體的なものであつた。それは、イオニア學派の説いた根源的な火、或は氣息、或はエーテルでありつつ、また理性 *Nous*、ロゴス、神を意味するものであつた。その生成展開は運命 *heimarmene* であるとともに攝理 *praxis* であつた。その折衷的性格はおおうべくもないが、眞の存在のピュシスの具體性、いわば大地性、を主張しようとしている點は認められてよいであろう。他方、人間存在の深い本質をなすものは、このロゴス、攝理、神、に對應する理性 *nous* である。ひとはこれによつてロゴス、攝理、神に隨順する途を知り、これを志向し實踐することができると云ふ。意志とは、まさしくこれを志

向し實踐する理性の機能に外ならぬ。この志向と實踐とを通じて、ひとはロゴスもしくは眞の存在に關與するのである。かくしてはじめてそこに、內的に充實した獨立不可侵の世界がひらけるのである。理性は事にふれて、種々の徳となり知恵となる。それらの各々に論及することはここでは省略するが、ここに注意すべきはその實踐にあつてストア派の強調した情念の制御、いわゆる *apatheia* の教えである。彼等は、恐怖、殘忍、憤怒、悲歎、焦慮、等の破壊的情念を否定したのみならず愛他的實踐に不可分と考えられる惻隱、あわれみの情念をすらきびしく否定し、その嚴格な抑制を説いている。たとえば、セネカ (Seneca 卷55-40 B. C.) によれば、他人の不幸を見て呼び起されるあわれみは心のやまいであるから賢者はこれに屈してはならぬ。またエピクテトス (Epictetos 卷55-135 A. D.) によれば、悲しむひとに同情のことはをかけるのはよいが、それを内に感じてはいけないのである。このような教えが人々の反撥を招いてきたことはむしろ當然であろう。おもうに彼等が何よりも恐れたのは情念の波立ちによつて意志の王國の自由と靜穩とが掻きみだされることであつた。彼等は恐怖を根據なき破壊的情念として否定しながらも、情念のもつ破壊の力に對しては恐怖に近い警戒的態度をとり、激しい防禦の手段を講ぜざるを得なかつたのである。ここにストア思想の矛盾があり限界がある。歴史家トインビー (A. Toynbee) が、慈悲或は愛のために苦惱すること——ストア派のおそれるもの——をおそれない高次宗教の光にてらして、ストア思想の自己中心的性格をきびしく批判したのは故あることと云わなければならぬ。